



「犯罪や非行のない地域にするために私にできること」

高砂市立荒井小学校 5年 坂本 愛梨

お母さんと買い物に行った時の話です。スーパーのレジの前で知らない女の人がお母さんに話しかけてきました。

「会計は今からかい？」

と急に話しかけられて、お母さんはちょっとびっくりした顔で

「あ、はい。」

と答えると、その女の方は

「よかった、これあげる。」

と言って、割引券をくれました。お母さんはそれを受け取り、にこにこ顔になっていました。

私は、お母さんに

「割引券がもらえて良かったね。」

と言いました。お母さんは

「割り引いてもらって得をしたというのは確かにうれしいけれど、それ以上にうれしいのは、全く知らない人が元気に話しかけてきてくれたこと。その行為がとてもうれしく思ったの。知らない人に話しかけるって、ちょっと抵抗があったり面倒だったりするけど、その行為をしてくれた。そういうことをできる人がたくさんいたら、きっといい地域になるような気がして。」
そう言いました。

私はすぐに意味が分からなかったので、少し考えました。知らない人に話しかけるのは得意ではありません。5年生になった今は、大丈夫だけれど、小さい時はとなりのお家の人に会っても、大きな声であいさつするというのは、ものすごく恥ずかしくてなかなかできませんでした。今は、そんなことはないけれど、知らない人に声をかけるのは、やっぱり今でもものすごくハードルが高いです。でも、スーパーでのこの件のことがあってからは、「もしも困っている人がいた時などは、知らない人でも声をかける!!」と自分の中で決めました。

犯罪のない社会は、きっと誰でも目指したいものだと思います。でも、世界でも日本でも毎日、何かの犯罪が起きてしまっています。それを、全部なくすのはむずかしいけれど、知らない人でも声をかけられるようなふんい気のできる地域にすることで、少し近づくのではないかな？そう思うようになりました。あの時、うれしそうにしているお母さんを思い出すと、私もとてもうれしい気持ちになりました。うれしい気持ちをバトンのようにつなげるためには、誰かが人に親切にするスタートを切らなくてはいけないのかも知れません。それなら、私もスタートを切れる人になりたいと思います。

そう思って過ごすようになったある日、登校班がいっしょの2年生の女の子が、登校中に転んでしまい、ひざをすりむいてしまったことがありました。同じ班でもあまり話をしたことがなかった子だったけれど、私は勇気を出して

「大丈夫？」

と声をかけて、ばんそうこうをはってあげました。女の子は

「ありがとう。」

と恥ずかしそうに、でもにっこり笑って言いました。声をかけることが出来た自分にも、その子が笑顔になったこともうれしかったです。

犯罪のない社会を作ることとはとても大きな目標で、人に親切にすることの一つ一つは、とても小さなことかも知れない。でも、「人にやさしくする」「人に親切にする」、その小さなことをたくさんしていくことは、犯罪のない社会に少しでも近づける初めの一歩になると思います。私もそんな一歩目であるスタートをたくさん切って、うれしい気持ちのバトンをみんなでつなげて、犯罪のない社会を作っていきたいと思います。

